

中学生派遣事業

現地レポート

学校新聞特派員

音楽姉妹都市竹田市

8月5日から7日までの3日間、高社中学校3年生の大川陸さん、赤星光誓さん、佐藤悠里さんの3人が「学校新聞特派員」として音楽姉妹都市の大分県竹田市取材しました。3人がまとめた報告書の中から、一部をご紹介します。

竹田市はこんなところ

人口2万6千人の竹田市は、大分県の南西部に位置し、九重連山、阿蘇外輪山、祖母山麓といった山々に囲まれています。

水と緑があふれる自然豊かな

な地域であり、山々から湧き出る豊かな名水は、全国的にも知られ、大自然の恵みを活かした農業や観光が竹田市の魅力となっています。

例えば農業では、大分県の特産品であるカボスやシイタケといった野菜や、食用の豊後牛などの畜産が盛んです。また、観光では「荒城の月」で知られる岡城跡、滝廉太郎記念館などの文化財も数多く残されています。自然に目を向ければ、日本一の炭酸泉と言われる長湯温泉、雄大な久住高原なども見られます。さらに竹田市では、大分県一のあいさつ都市を目指しており、街全体が明るさと、活気であふれています。



▲竹田市長と「音楽姉妹都市提携に関する協定書」を持って記念撮影

(大川陸)

平和学習で学んだこと

竹田市の小中学校では毎年8月6日に学校に集まり平和学習をしています。私たちは、初めに竹田中学校3年2組の生徒の皆さんと「ヒロシマの事について考える」というテーマで広島に投下された原爆やその被害について一緒に学習しました。原子爆弾が投下されなければ幸せな人生を送れたかもしれない多くの人が、一瞬にして亡くなったという事実に私はあらためて衝撃を受けました。

続いて、全校集会では「核兵器は必要か、必要ではないか」というテーマについて考えました。私は、核兵器は絶対に必要なものではないと思います。例えば自分の命を守れたとしても、相手の命は守れない、得るものは少ないけど失うものは多いと思うからです。他の人の意見の中には、核兵器はあっても仕方がないというものもありました。しかし、さまざまな考え方はあるけれど、人の命を奪ってはいけませんということだけは確かであると私は思いました。

(佐藤悠里)

大変有意義だった3日間

初日は、電車・新幹線・飛行機などさまざまな乗り物を乗り継ぎ、半日以上かけて熊本空港に着きました。そこからは、竹田市の職員の方に車で市役所まで乗せていただきました。

途上で見た阿蘇山のおもとの草原がどこまでも広がる景色はとてきれいでした。また、山がちな地形は中野市に似ていてとても親近感が湧きました。

2日目は、竹田中学校へ向



▲竹田中学校のゆるキャラ「モーニン」と

かい、玄関では竹田中学校のゆるキャラ「モーニン」が迎えに来てくれました。生徒の皆さんと一緒に平和学習を行い、黙とうをしました。また午後には、岡城跡、滝廉太郎記念館へ行き、少年時代の廉太郎が見た景色や音を実際に感じる事ができました。

今回の竹田市の訪問はとても楽しく、新しい発見がたくさんありました。また、もつと中野市の皆さんに音楽姉妹都市である竹田市の事を知ってもらえるように今回感じたことを積極的に紹介していきたいと思えます。

(赤星光誓)

被爆地派遣 〜広島市〜

8月4日から6日までの3日間、中野平中学校3年生の浅沼勇輝さん、村瀬鉄馬さん、今井真奈美さん、和田野々花さんの4人が「平和使節」として、被爆地の広島県広島市を訪問しました。4人がまとめた報告書の中から、一部をご紹介します。

広島平和記念資料館

1日目の午後に広島市内の平和記念資料館に行き、戦争の悲しさや原爆の恐ろしさなどについて見学してきました。平和記念資料館には、原爆が落ちた8時15分を示したまま止まった時計や、熱線を浴びてはがれてしまった爪や皮膚など、漠然と想像していたものよりもずっと衝撃的で悲惨な、当時の写真や遺品の数々が展示されていました。それらの展示品の中に込められた、被爆された方の苦しみや悲しみといった思いを目の当たりにして、僕自身もとても悲しく感じました。



▲原爆が落ちたまま止まった時計

広島市立翠町中学校

2日目の午前中、広島市の翠町中学校との平和交流会がありました。この交流会では、今までそれぞれの学校でどのような平和学習をしてきたかを、自己紹介や学校紹介を入りながら話をしました。中野平中学校は戦時中、弾薬庫として使われた「十三崖」について、翠町中学校は被爆者の声を集めた「空白の学級簿」について発表しました。この会を通して、戦争がもたらした被害について、互いの知らなかったことを知ることができ、平和についての考えをより深められました。また、翠町中学校では、毎年校内慰霊祭が行われています。全校で被害にあった人に黙とうを捧げ、献花を行います。私たちも慰霊塔に献花させていただきました。



▲翠町中学校との交流（連帯旗の交換）

ヒロシマ青少年平和の集い

2日目の午後には「青少年平和の集い」に参加しました。そこでは12歳の時に被爆体験をした笠岡貞江さんのお話を聞きしました。原爆が落とされた日、広島に流れる7つの川が死体で埋まったこと、被爆体験者という理由で戦後も進学・就職・結婚で差別されたこと。たくさんのお話を話してくださいました。何となく怖いもの、と考えていた戦争の本当の怖さを少し理解できた気がします。実際に戦争を体験された方の話に関する話、今まで聞いた戦争に関する話よりも重く、胸に刺さりました。笠岡さんは戦争でとてもつらい思いをされましたが、

今まで人の相談に乗る仕事をしてきたことで、自分自身の人生を振り返ることができて今は幸せだと仰っていました。これを聞いて言葉にできない深い感動を覚えました。

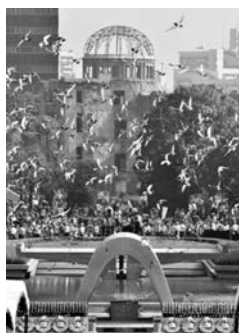


▲平和学習会

平和記念式典

広島派遣3日目、8月6日に行われた平和記念式典に参加しました。世界各国の人が参列していて、原爆はよくないものだ、という認識が世界共通のものだということを実感しました。8時15分、平和の鐘とともに少しざわわわっていた会場全体が静まり返り、戦没者へ黙とうが始まりました。会場の中にも戦没者を慰霊する気持ちがあつたからこそ静寂に包まれた1分間になったのだと思うと思います。国連事務総長のメッセージには「ノーモア・

ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ二度と再び」という言葉が使われていました。広島、長崎での悲劇が二度と繰り返されないよう被爆者の声と、原爆の事実を伝えていくことが大切だと、何度も思いました。式典の最後には「ひろしま平和の歌」を参列者全員で合唱しました。会場全体から歌声が聞こえてきて、この式典のように戦争の悲劇を多くの人に向けて発信することで国境を越え平和は広がっていくのだと思いました。



▲平和記念式典

3日間を通して

3日間の経験の中で、共通して思ったことがあります。それは「戦争によりもたらされたもの」「戦争の悲惨さ」を未来へ、多くの人へ伝えていかなければならないということです。その第一歩として、まずは中野平中学校の生徒に、平和について私たちが学んだことを伝えていこうと思います。